

『今月の天候と農作業』

通巻第5633号
11月号
令和元年10月31日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温の変動が大きいです。

【予報のポイント】

1週目は気温が高く、2週目は平年並か低い見込みで、期間の前半は気温の変動が大きいです。

1週目を中心に暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

湿った空気の影響を受けにくいいため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は平年並か多いでしょう。

【確率(%)】

| 要素 | 予報対象地域 | 低い (少ない) | 平年並 | 高い (多い) |
|------|--------|-------------|-----|------------|
| 気温 | 九州南部 | 20 | 40 | 40 |
| 降水量 | 九州南部 | 40 | 40 | 20 |
| 日照時間 | 九州南部 | 20 | 40 | 40 |

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。期間の後半は、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 11月2日(土)～ 11月8日(金)

気圧の谷や湿った空気の影響で雲の広がる日もありますが、高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 11月9日(土)～ 11月15日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 11月16日(土)～ 11月29日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆大豆

1 収穫と乾燥

収穫時の大豆の青立ち株や雑草が混じると、茎汁で汚損粒の原因になります。青立ち株にはカメ虫被害粒も多いため、必ず抜き取ります。成熟期は完全落葉し、莢色が黄色から変色後、莢がカラカラと音がする頃です。コンバイン収穫では、さらに10日ほど過ぎ、枝がポキポキ折れる時で、茎水分の高い早朝は避けます。

一方、バインダーや刈払機での収穫は、乾燥していると刈る際の衝撃で飛び散り、ロスにつながるため、茎水分の高い早朝か夕方に行います。播種が遅れた圃場では、莢の位置が低くなることあるため、泥の混入に注意します。乾燥作業は、高温ではしわや皮切れを起こすため、温度を30℃以下にします。

◆ソバ

1 収穫と乾燥

バインダーや手刈りでは、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に行い、10日ほど島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。コンバイン収穫では、80～90%黒変した時ですが、茎葉に水分が多いと機械に詰まるため、注意します。乾燥は静置式乾燥機などで温度は30℃以下で行います。その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

1 圃場の準備

排水良好な圃場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いため、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程度施用し、元肥は地区基準を参考にします。

2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では11月中旬、沿海部では同下旬から12月初めに行い、周囲や3～5m間隔に溝を掘り、湿害対策を行います。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆施設野菜全般

11月末までは寒暖の差が大きいため、夕方早めに内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の

温度管理を心掛けましょう。特にきゅうり、トマト類の比較的低温で管理する作物は、夜温が下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となり、草勢が低下しやすいため、適期に収穫し、不良果は早めに摘果します。かん水は反当1.5～2t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて施用します。

促成きゅうりは、主枝から側枝の収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。10℃を目安に夜温管理を行います。夜温が高い場合、内張ビニルを開けてハウス内の湿度を下げるなどの対策を行います。追肥は主枝収穫開始と同時に開始します。かん水は果実肥大に合わせて、かん水量を少量にして回数を多くします。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。作物本体への着果負担も大きく、収穫遅れは草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長するため、適期収穫を心掛けましょう。草勢維持のため、果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行います。下旬より収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥を行います。追肥は草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマトで第5果房の開花時より開始します。

◆いちご

今年の花芽分化・頂芽の出雷は平年並みですが、地域によって早晩が異なるようです。夜温管理として、開花肥大期は10～12℃、着色期8～10℃、収穫期7～8℃を目安に、生育状況に合わせた温度管理を行ってください。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(黒木 正晶)

葉茎菜類及びいも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。収穫遅れや地上部の生育が悪かったほ場のものや収穫が遅れたもの、雨天後収穫のものは貯蔵性が劣るため、長期貯蔵は避けます。傷のつたいものは貯蔵中に腐敗しやすいため、収穫作業は丁寧に行いましょう。また、翌年の苗を取るための種芋は、病害の発生したほ場から取らないでください。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいいため、一度に大量に入庫すると貯蔵庫内の

CO₂濃度が上昇したり、湿度が高くなりすぎて結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防ぎましょう。空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し、新鮮な空気と入れ替えましょう。貯蔵期間中は温度13℃、湿度90%を保ちましょう。

◆さといも

翌年の種芋保管のためには「枯れ上がり症状」の見られた圃場や、「芽つぶれ症」、「乾腐病」の疑いがあるものは使用を避け、優良なものだけを子いもが離れないよう株毎に保存します。圃場で保存する場合は、低温障害を受けないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

◆さといもやかんしょなど収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害の伝染環を絶つため、収穫が終わった畑は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し堆肥舎で腐熟させます。ほ場外に持ち出せない残さはトラクター速度を遅く、ロータリー回転を早くし細かく破碎します。畑や水路近くへの残さの放棄は決してしないでください。無発病の畑や種芋採取用の畑に入るときは、長靴や農機具を洗浄して使いましょう。

◆たまねぎ

定植時期となります。地力の高い排水の良い圃場を選定し、十分な根域を確保するための深耕や、表面排水を促すための排水溝の整備をします。排水があまり良くない畑では、可能な限り畦を高くします。

植付けの深さは3～4cmです。深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）が多くなるため、注意が必要です。植付け後3～5日間は株元にかん水を行い、活着を促します。

◆らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10a当たり窒素成分で5kg程度を追肥し、土寄せを行ってください。

（杉村 幸代）

果 樹

1 常緑果樹

◆中晩生かんきつ全般

樹体に肥料が吸収され、秋肥の効果を十分に果たすためには、12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期にあたります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類では、この時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆日向夏の落果防止

日向夏は土壌の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤（マデック乳剤）を11～12月に散布しましょう。

◆完熟きんかん

10月からの秋季加温で十分に肥大が確保された園では、昼温や夜温を徐々に落としていきましょう。肥大不足の園では、秋季加温を継続しましょう（昼間の温度は28℃、夜間は外気温+3℃の15～16℃を目安とする）。

◆マンゴー

花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温6～8℃程度を維持しましょう。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の花芽発生を確認後、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。開花が始まるまではできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させましょう。

2 果樹園共通

防風林や防風ネットの整備は、冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

（鈴木 美里）

花 き

◆キク

11月になると、気温の低下に伴い植物体が結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まるため、曇雨天時は送風を行うなどして、結露防止に努めましょう。

年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長を防止し、花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に実施してください。

◆スイートピー

採花開始時期となります。

安定した着花を促すため、徐々にかん水を控えるようにしましょう。

また、曇雨天後の晴天が予想される場合は、あらかじめカルシウム剤を葉面散布するなど、生長点や葉の焼けを防止する対策を取り、必要に応じて遮光を行いましょう。

夜間の加温が必要な時期となるため、ダクトの設置を早めに行い、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始し、うどんこ病及び灰色かび病対策に早いうちから取り組みましょう。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用して茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行うことで花落ちを防止しましょう。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始してください。

◆トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりブラスチングが多発するため、追肥は発蕾前に終わってください。

一方、10月定植株は葉先枯れ症状（チップバーン）が発生しやすい時期になります。徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤の施用を行いましょう。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下しますので、徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ります。

夜間の加温が必要であるため、早めにダクトを設置し、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

また、日中の温度が低すぎると生育が緩慢になるため、15℃を目安にサイドや妻面等の開閉を行い、品質向上並びに増収を図りましょう。

（藤原 明紀）

畜産

◆家畜防疫対策

豚では、10月末現在で、岐阜県、愛知県、埼玉県等の8府県において、豚コレラの発生46例発生し、感染が終息せず、発生地域での豚コレラワクチン接種の実施の方針が決定されたところです。

また、アフリカ豚コレラは、韓国で初めての発生があり、国内への侵入リスクが高まっています。これらの法定伝染病から、農場を守るため、豚舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

朝晩の冷え込みが厳しくなる時期です。朝夕の畜舎カーテンの開け閉めを行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図りましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材の点検と、子牛の保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。さらに、牛では飼料作物の収穫と作付けの時期でもあり、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されるため、交配期にある牛については、朝夕の観察の徹底を図りましょう。

◆飼料作物

牛の粗飼料は、飼料用稲、二期作・遅まきトウモロコシ、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン・エン麦などの、秋冬作の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないように計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。

(三角 久志)

工芸作物

◆茶

1 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性獲得が遅れる傾向にあり、秋冬期（11月～12月）防霜の重要性が高まっています。更に、冬期の寒害・凍害の防止対策では、防風垣や防風ネットを設置します。

また、幼木園では敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。万が一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行います。

2 定植病虫害の防除

一番茶前の密度増加が気になるカンザワハダニに対しては、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、専用ノズルを用いた適正防除に努めます。

また、県内茶園ではチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行います。

(黒木 清人)

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施し、11月下旬頃までには行いましょう。

また、伐採後は、葉枯らし乾燥を40～60日程度実施しましょう。

2 発生操作

ほだ起こし時期は品種によって異なるため、最低気温（例 低中温性品種であれば最低気温が10℃前後に下がったとき）を考慮して決定しましょう。

また、ほだ起こし後に散水を行うと、より発生しやすくなります。

なお、風が強く吹き込むほだ場は、乾燥によってしいたけの生育の不良や、変形しやすくなるため、防風ネット等を設けると良いでしょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

- 1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低下と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。
 - 2 耕作予定ほ地の土づくりのため、石灰・ようりん等の散布を行い、土壌改良に努めましょう
石灰散布をする場合は、石灰に消毒剤の成分が吸着され、効果が半減するので消毒処理1ヶ月後に散布しましょう。
 - 3 土壌消毒を実施する際には、薬害、公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に則って土壌水分が60%程度（軽く握った時に割れ目が2～3個できる程度）の時期を選んで実施しましょう。
また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理しましょう。
 - 4 良質堆肥（10a当たり1,200kg以上）施用に向けて、材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるために水分60%程度保ちながら月に1回程度切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図りましょう。
- また、塩素グレー発生防止のため、脱塩した堆肥を使用しましょう。
- 5 販売終了後は、乾燥室・貯蔵庫・作業場の清掃を徹底しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

| 農作物名 | 病害虫名 | 発生量 | 発生状況と防除対策 |
|----------|--------------------------|--|---|
| 施設野菜全般 | アブラムシ類 | やや少 | アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。 |
| | ハスモンヨトウ | 並 | 中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。 |
| 冬春きゅうり | べと病 | 並 | いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。 |
| | うどんこ病 | 少 | |
| | 褐斑病 | 並 | |
| | 黄化えそ病 (MYSV) | — | ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。 |
| | ミナミキイロアザミウマ | 並 | |
| タバココナジラミ | 並 | タバココナジラミには薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は、異なる系統の殺虫剤による追加の防除を行います。 | |
| 冬春ピーマン | 斑点病 | 並 | いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。 黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。 |
| | うどんこ病 | 並 | |
| | 黒枯病 | 並 | |
| | ミナミキイロアザミウマ ヒズメハアザミウマ | やや少 並 | ミナミキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。 |
| 冬春トマト | 葉かび病 すすかび病 | 並 やや多 | どちらも多湿条件下で発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気に努めます。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。 |
| | トマト黄化葉巻病 (TYLCV) | 並 | トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。 |
| | タバココナジラミ | 並 | |
| 冬春いちご | うどんこ病 | やや少 | うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。 |
| | 炭疽病 | やや多 | |
| | ハダニ類 アブラムシ類 | やや少 少 | 収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。 |
| かんきつ類 | ミカンハダニ | やや少 | 生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。 |
| 茶 | カンザワハダニ | やや少 | 本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。 |

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

